

釣りに釣られて

高原英夫

第二十四回 「馬淵川（その二）」 必死の犬かき

馬淵川は二、三日前に降った大雨のため、まだ茶色に染まり、いつもだと川底に石ころなどが見える清流は、すっかり対岸まで一色で、強い勢いの流れとなっていた。

水は相当の高さまで上がったらしく、上流から流されたビニールが川辺のあちこちの柳に絡み付いていた。

ミッツとヒサシと私の三人は、発電所から少し上流のいつも川遊びする場所からその濁流を眺めていたのだが、ミッツが、

「泳いでみるが」

と言い出したのである。それまでも色んな遊びはしてきたが、子ども心にもこれは死ぬかもしれないという恐怖が過った。いや、言い出したミッツだって、本当に泳ごうとは思っていないとわかっていた。

だが、思いとは裏腹に、

「うん、でも、こつち側からだとな……」

と、対岸からこつち岸に泳ぐのだったらと、曖昧な返事が出てしまった。確かに向こう岸はもう岩手県で、川といえども真ん中からは岩手県なわけで、子供ながらにこの馬淵川を国境のように思い、あまり向こう岸に行くこともなく、川の様子はわからなかった

「じゃ、やめる」と言つて欲しかった。

ただ、向こう岸からだ途中まで少し浅くなっていることは知っていたので、向こう岸から、できるだけ川の中を歩き、そこから一気に泳ぎ着くほうがいい。三人は恐いのだがそんな話を始めた。弱虫と思われたくない、それは子供だからこそ何よりも大切な思いだった。イヤだとは言えない三人がいた。

だが、話はトントンと進んだ。その場にランニングシャツを脱ぎ、靴を脱いで裸足になり、パンツ一枚になった。まずはこちらの岸をすこし下流に行くと吊り橋がある。それを渡るともう岩手県で、右に上流へ行くと発電所がある。そこを過ぎると、さつき三人がいた場所の対岸となる。三人は黙々と進む。しかし、胸の中の不

安を誰も自分からは言い出さない。もちろん私も。

やはり、川はおなじ勢いで流れている。時折、何か物が流されていくのだが、その流れは、とてつもなく速かった。

今、目指そうとしているその場所こそは、夏休み中毎日のように通った水遊び場だった。誰もがそこで上級生から泳ぎ方を教えられ、また下級生に教えた。

川の土手には人が三、四人ほど寄りかかれる程の大きな岩があった。体が冷えると水から上がりその大岩に寄りかかるのだ。夏の日に灼けた岩は心地よく体を温め、紫色だった唇はすぐに血の気が戻った。

川のすぐ前のざぶんと飛び込めばもう手が届くところに、水面から少し頭を出した大きな岩があった。それを一番石と呼んだ。そしてまたひと飛び込みすれば、また大きな岩があり、それを二番石と呼び、同じようにして三番石まであった。もちろん、その周りは小学生がやつと頭が出る深さで、泳いでしか行けなかった。一番、二番、三番と続く石へ行けるようになることが、泳ぎがどの位上達したかの証で

あつた。そして三番石から戻る時は岸に向かつて左斜めに四、五人が乗れるほどの平べつたい岩があつた。そこへはしつかりとした犬かきなり、クロールなりができないと渡れず、これは上級生が得意げに泳ぐ見せ場でもあつた。

対岸からは一番石も、二番石も何もかも濁流の中に隠れて見えない。しかし、もう逡巡する時間はずつと過ぎていた。

「誰から行く？」

と言うとミッツは言い出しつぺの立場から、

「ワが行くがら」

と言つた。続けて、

「へば、ワ、次行く」

そして三番手はヒサシに決まつた。

三人は川に入ると、見えない川底を足でまさぐりながら、できるだけ立つていられる場所まで進んだ。しかし流れはきつく、腰の深さまで行けただろうか。ミッツ

は、

「行くぞ」

と言って泳ぎだした。いわずと知れた犬かきである。川幅は何メートルあるだろう。五、六十メートルだろうか。小石をどんなにうまく投げても対岸に届いたためしはなく、手前でポシャつと落ちていた。そのうち十メートルは川の中を歩いて進めたのだろうか。

ミツツはぐんぐん流されていく、対岸どころの話ではない。右側にほぼ真横に流れていった。少し浮いた坊主頭の後ろとバシャバシャと水を蹴る姿だけが見えていて、その表情は見えない。必死なものには違いなかった。流されてやつといつもの遊び場から百メートルほど離れた場所にミツツは着いた。安堵感だけははつきり見えた。

つぎは私だった。犬かきだった。ただミツツの泳いだ跡が線となって頭に残っていた。一直線に前へだけ進めばいいというわけではないとわかった。だからそう力を入れることはないと思つた。ただあのあたりに流されて着けばよいとわかつてい

でも、その流れのままにぐんぐんと下る時は、死んでしまふのかなと思つた。ああダメだ。諦めたらもう本当に死ぬんだと思つた。力まないとは言つてみたものの死の恐怖から必死の思いで足をバタつかせ、手で漕いでいた。ミッツが土手を私の流れと一緒に走っている。あと少しだ。あと少しだ。やつとの思いで、岸の岩に手が届いた。

「死ななかつた」

しばらくは声を出すことも出来ず、全身の力を使い果たし動けない。でも次にヒサシが来る。すぐ土手に上がらなければ。ミッツと一緒にヒサシに手を振つた。ヒサシも必死に泳ぎ始めた。形相が違つて見える。私もミッツもそうだったに違いない。しかし泳いでいる間は、誰も手助け出来ない。救おうにも救えないという極限の状況に置かれている。自分の手と足だけが生き残る為の道具だ。ともかく泳いだ。ヒサシも無事に着いた。後で見ると三人はほとんど同じ場所に着いたのだつた。それぞれに同じ位の体力をつけていたのだろう。そしてミッツのたどり着いたコースならヒサシも私も頭の奥で思い、ミッツの着いた場所を狙つて泳いだことになつ

たのだと思う。

三人はぐったりとしながら、しかし満足感でもなく、とんでもないことをしでかしたと思っていた。ただ無事でよかったと何度も繰り返した。

何年後だったか、私の妹の同級生が、その場から二キロほど上流で川遊びの最中、溺れて亡くなった。その日は増水していたわけでもなく、晴天で平凡な夏の日だった。

平成23年11月